



## KEYS（転生物語）

—

「神よ、お願いだ、転生させてくれ……貴族に……生まれ変わらせてくれ」

そうつぶやきながら俺は少女の身体を激しく貫いていた。未成熟な乳房、細い腰、脂肪の少ない腕。彼女は貴族の年齢に照らし合わせれば少女に見えるが永遠の命を持つ我々奴隷に人生の年輪など意味はない。激しい夏の太陽が俺達の裸の背中をじりじりと焼いている。そこは山の中の獣と鍵師だけが知る泉のほとりだった。平和なこぼこぼという湧き水の音を聞きながら、俺は少女の乳房をちぎれんばかりに握り締めて、彼女の唇を強く吸いながら夢中に少女を犯していた。

俺はお尋ね者の、**鍵師**である。貴族に見つかったら地下牢に永遠に閉じ込められる運命にある者だ。そして俺たちの存在を知る奴隷たちは

俺達、鍵師の来訪をまるで長期間の日照りの後の雨のように待ち侘びている。何故なら奴隷の女の股間には全員貴族によって取り付けられている鉄製の”貞操帯”があり、男女の営みをするにはそれを外す、鍵師、が絶対必要だからだ。だから鍵師の存在を貴族に密告する農民を俺は見ることがない。

彼女に会ったのは今いる場所から西に少し歩いたところにある山道を少し脇にいった林の中だった。俺たち鍵師は人目を避けて生きねばならない為常にそういった山間部を放浪し、山菜を採ったり、木の実を取ったりして暮らしている。俺たちは貴族たちには分からない、農民たちにだけ分かる方法（例えば木の枝を特殊な方法で結ぶとか、野鳥の卵の殻を切り株に置いておく等）で自分たちの居場所をこっそり教える。すると農民たちは男と女が”つがい”となつてやってくる俺たちが女の股間にあるその醜い鉄製のものを開けてやることで、ようやく男女の営みを行うことができる。そして彼らはその礼として俺たちに農作物や着る物などを置いていってくる習慣があつた。

しかし、その少女と会った時の俺と農民たちとの出会いはそれほど友好的なものではなかった。俺が通りがかったとき数人の農民たちはその少女を日陰が出来る櫓の大木の根元で素っ裸にして陵辱していたのだ。陵辱するといっても女の股間に鉄製の貞操帯があるので膣に男根を挿入するようなことはできない。そのため男たちは少女の肛門（その鉄製の道具は尻の部分は排泄できるように丸い穴が開いている）や口を使って性交していた。

だが、遠くから見てもその光景は意外なほど惨たらしくは見えなかった。なぜなら当事者の少女がなにか嬉しそうに腰を振りながら私たちの欲望を受けとめていたからである。しかし、俺はその少女の顔を見てその場で失神するくらいの衝撃をうけた（実際その場でへたりこみ、しばらく立ち上がれなかったのだが）。

「こゝ、これで貴族に……生まれ変わる……」  
俺はそうつぶやきながら以前、鍵師の師匠が語っていた話を思い出していた。

「”転生”の鍵となる女はこの世界で一人しかいないらしい」

およそ三百年も前に、師匠はいつものように仕事が終わると農民からもらった酒を飲みつつ焚き火による炎の踊りを楽しそうに眺めながら突然それを話してくれた。

「世界に一人ですか。なるほど”転生”が容易でないはずだ……世界中の女と出会うなど不可能だから」と俺は深いため息をついて言った。

「お前はどうかやら本当に”貴族”に転生したいようだな」と師匠はからかうように俺に言う。

「この世の中で”奴隷”でいる事を好む者がどこにいますか！」と、俺はむきになって師匠に噛みつく。

「我々”奴隷”は”生殖”もない代わりに”

死”がないのだ……そして”貴族”どもには”

生殖”があり”死”がある」と彼は大酒を飲んでいゝるわりに明晰な口調で語り続ける。まるで哲学者のような重々しい響きさえ感じる。

「永遠の命があつたとしても、奴隷として田を這いずり回って生きる人生に何の意味があるの

ですか？」と俺は顔をしかめて逆に師匠に質問した。

俺は鍵師になる以前の水田で牛馬のように扱き使われた、地獄の日々を思い出していた。早朝から夜更けまでろくな食い物も与えられずに、俺たちは休みなく働かされる。空腹で常に腹は鳴っているが、永遠の命のおかげでいくらやせ衰えても死にはしない。貴族である奴隷主は、ようやく夜になって家畜に与えるのと同じ稗や粟の砕いた粉を水と一緒に俺たちの小屋の前に置いていく。それでも、奴隷はそれを有難がって奪い合って食べるしかないのだ。自分たちが作っている白い米など、一年の秋祭りの特別な日にしか食べさせてもらえない。そんな日々が永遠に続くことに何の意味があるというのか。しかも、奴隷は家族も持てず、永遠の孤独と付き合って生きねばならない。

「しかし、貴族になれば”死”を恐れる日々を生きる。確かに彼らは死んでもまた別の貴族に生まれ変われるという事らしいが、それでも”死”は恐ろしいことだろうな……」

「私は”鍵”を絶対に見つける……そして奴隷としての境涯から抜け出してやる」

「なるほどな、まあそれも一つの生き方だな」と彼は冷静な声で俺の意気込みをからかうように微笑む。

「”鍵”となる相手はどうやって分かるのですか」俺は彼の揶揄する表情を無視して質問を続ける。

「実はそれは簡単なのだ」と茶目っ気のあるおどけた表情で師匠が俺に微笑む。

「か、か簡単？」俺はびっくりして大声で叫んだ。

「その鍵となる相手とある一定の距離に近づけば、自然とその相手が夢のなかに現れるらしい」

「そんな簡単なこととは……それではもっと転生するものが多いのでは」俺はまだまだ希望があることに心から神に感謝する。

「実際多いのかもしれない。せっかく貴族になって、わざわざ自分が奴隷から転生した事など告白する者はそう多くはないだろうからな」と師匠は続ける。

「では、転生しても奴隷の頃の記憶は残っているのですか」

「どの程度でか、知らんが残っているという噂だよ」と彼は親切に教えてくれた。

「なるほど」俺だってもし貴族に転生したとしても奴隷の過去を告白する愚かな真似はしないだろう。

「まあ、相手を見つけるには自由に旅をして色々な異性に会う必要がある。貴族に監視されて一箇所にずっと縛り付けられて生きている農民には”鍵”を見つるのは難しいだろうな」

「で、では鍵師の場合は……」俺は緊張しながら彼の答えを待つ。

「まあ、鍵師が奴隷の中ではもっとも転生できる可能性が高いことは間違いないだろう」と師匠は俺が最も期待した答えを気軽に口にする。

俺は喜びのあまり彼に抱きつきたくなる衝動に駆られる。

「私は絶対に見つけます……運命のその”鍵”となる女を」

「まあ、旅をしながらゆっくりと探すがいいさ、どうせ貴族に追い回される我々は常に旅する運命だからな」彼はそういつて相変わらず闇の中で幻想的に踊る炎を瞬きもせずに見つめていた。

まるで炎の形状で人の運命を読む怪しげな占い師のように。

その夢の女が今俺の眼前に犯されている少女だったのだから俺が驚くのも無理はないだろう。彼女が夢に出てくるようになったのは半月ほど前からだろうか。それは師匠に”鍵”の話聞いてから三百年も経った頃でいい加減”鍵”の話は時々思い出す程度になっていた頃だったが。

「おい、手前は何だ」と農民の一人が彼らにゆっくりと近づいてくる俺を見つけて敵愾心むきだしの表情で俺に言った。首が太くて全体にずんぐりとした体つきの男である。肉弾戦になった時に鍵を開けるに足りる筋肉しかない俺が勝てる見込みは皆無と言っている。

「鍵師だよ」と俺は短く答えた。

「な、なに、か、かか、”鍵師”だと！」と背の高いほうの農民が答える。この男は農民にしては少し学のある顔をしていた。そして俺が鍵師だと知ると急に友好的な笑顔を俺にむける。そして

「は、はやく、鍵を開けてくれ。鍵師とは五年ぶりだなあ。礼は弾むぜ」と勢い込んで言った。

「では、礼としてその女を好きにさせてもらおう」と、俺は男たちの唾液や精液で身体中がベトベトになったまま土の上に寝転ぶ少女を指差して言った。近くでみると少女は痩せてはいるが切れ長の瞳、長い睫、形のよい額にふっくらした唇をしていて男たちがそれなりに夢中になる理由が分かった。しかし、ニコニコ笑いながら素っ裸で土の上に寝転んで空をみている様子は常人にはない異常な何かを感じさせた。

「なんだと、てめえ。俺たちの女を寄こせだ」と三人目の髪の短い男が野太い声で叫んだ。なんとなく背の高い男以外は”鍵師”の存在を知らないような気がした。俺が”鍵師”だと名乗ってもなんの驚きも見せなかったからだ。無理もない話だ。この世界に鍵師の数は数えるほどしかいないため、俺たちの存在を知らないで生きる奴隷は数多くいることだろう。

「この女を好きにさせてくれたら、俺はここにしばらくいるよ。そして何人の女でも連れてき

てくれれば無料で”鍵”を開けてやる」と俺は話を通じそうな背の高い男にむけて話した。どうやらそれは正しい選択だったようだ。

「ふううん、それは素晴らしい条件だが」背の高い男はどうやら頭目のようだった。この男が話し出すと残りの二人は黙り込む。もしかしたら村長か、その親類なのかもしれない。

「この女は確かに”見てくれ”はいいが、あれだぜ……頭がおかしいんだぜ」と彼は少女のそばに座ってその乳房を揉みながら、薄笑いを浮かべて言った。少女もくすぐったそうにケラケラと笑って鉄のもので覆われた股間をイヤイヤするように無邪気に揺らしている。

「なるほど、でも俺はこの娘の面（つら）が気に入ったんだよ。身体もなかなか良い」と俺は真意を悟られないようにして続けた。

「ふううん、なんだいこの女、もしかしてあなたにとってあれか？……鍵なのか？」頭目風の男は探るような目つきで言った。

「……まさか」あの鍵の話”を聞いたのか。どこの嘘つきの”鍵師”が言ったか分からないが、そんなのはただの御伽噺だよ」と俺はなる

べく平静を装って微笑みさえ浮かべて言った。

（頼む俺の嘘を見破るなよ……）

「御伽噺かあ、まあそうかもな。たかが一人の女に出会っただけで、この地獄から抜け出せるなんて甘い話があるはずはないもんな」と彼は寂しそうな顔で言った。俺は何か彼の夢を砕いてしまったような気がして少し気の毒になったが、真実を告げるほどお人好しではない。

「よし分かった。この女を好きにしてい。しかし今晚から俺たちが連れてくる女の鍵は必ず全て開けてくれよ」と頭目は物分りの良いところを見せてくれた。俺は心からほっとして「ああ、もちろんだ。あんたたちも本物の”性交”をたっぷりと楽しんでくれ」と俺は笑顔で答えた。

「頭、なんだい”本物の性交”ってのは」とずんぐり男が好色な欲望を目に浮かべて言った。「”鍵のない性交”だよ。俺だって五十年ぶりだぜ。たまらねえぞ」と頭目は興奮で顔を少しゆがませながら笑った。

「鍵が開けられるのか、この男が？」と短い髪の毛もようやく事態が飲み込めたのか興奮して叫ぶ。

「ああ、開けられるよ。それが俺たち”鍵師”の生業だ。今晚から道具を磨いて待っている。楽しみにして女を連れてきてくれ、何人でもかまわないぜ」と俺は三人に明るくなるべく頼もしげに言った。それを聞いてようやく三人は機嫌よさげに俺と少女を残して山を降りていった。単純なやつらで本当に運が良かった。

自分を陵辱していた男たち三人が立ち去っても、少女は全く気にせず空を無心に見あげていた。俺は彼女の股間の辺りに腰をおろして早速”鍵”を開ける作業に取り掛かった。俺の内心の動揺とあせりが影響してか、作業は思いのほか梃子摺った。手が震えて、鍵の細工の解体方法が見極められなかったのだ。そして一刻ほど作業している間少女は大胆にも裸のままですつものまにか寝息を立てていた。俺が作業をしている間、平和な森の中では彼女の規則正しい寝息だけが響いていた。

なんとか仕掛けを壊してようやく鍵を開けて彼女を起こすと、少女は嬉しそうに何物も身に付けない股間を無防備に俺の前に露出している。俺は彼女自身の体液でヌルヌルしているあそこに指を恐る恐る入れてみた。

「本当にこれが俺の”鍵”なのか……ただの普通の女の膣にしか見えんが」俺は彼女のあそこを指でこじ開けてその奥の世界を覗いてみようとしたが、ただ桃色の内臓に似たようなものが広がっているばかりだった。

俺は彼女に着物を着せてしばらく歩いて、近くにある泉のほとりまで連れていった。いく”鍵”となる女とは言え、他の男どもの唾液や精液でまみれている身体をそのまま抱く気にはなれなかったからだ。泉を前にしても彼女はぼんやりと眺めているばかりなので、俺は彼女の着物を脱がせて汲んだきた泉の水でその身体を股間から尻の穴まで隅々まで洗い、口を水で何度もゆすがせた。そうしてようやく綺麗になった身体の彼女を前にして俺は無駄とは予想しながら話かけてみた。

「名前はなんという？」

「ゆ、ゆ由真」と彼女は不安そうな顔で、耳を澄ませてようやく聞き取れるような小さい声で言った。

「そうか、由真というのか。由真よ、俺はお前を半月前から夢で見えるようになっていたのだ、会えて嬉しいよ」と俺はなるべくゆつくりと話しかけた。

「ああ、ううあ……ああ」泣きそうな顔で少女は言葉にならない声を漏らした。この女にとつて言葉を交わすことは相当な苦痛だということが分かった。永遠の命を生きねばならない奴隷が、このような白痴の状態であることが不幸なことなのか幸福なことなのか俺には判断がつきかねた。

「俺の言うことが分かるか？ お前も俺を夢の中で見たことがあるか」

「あああうう、ああううあ」と彼女は涙を流しながら俺になにかを言っているようだったが、俺はそれに付き合うほど我慢強くはなかった。

「始めるぞ」俺は先ほどの男たちと同じように満足に言葉も話せない少女を土の上に組み伏し

て、怒張する男根をまともな前戯もせず、彼女  
の股間に突き刺していた。しかし彼女の股間は  
十分すぎるほど濡れていて、俺のものを完璧な  
ウルオイと又メリでもって迎え入れすぐに俺を  
快樂の滝坪に叩き落してくれた。さつきまで泣  
いていた少女は、いつのまにか快樂を覚え恍惚  
とした表情で、自らも腰を激しく振っていた。

「た、頼む俺を転生させてくれ……貴族の赤子  
に……生まれかわらせてくれええ……」俺がそ  
う叫んで腰を振っていると遠くのほうで不吉な  
音が聞こえてきた。それは一里（約六百三十三  
米）も離れてない距離を肉薄する騎馬の馬蹄の  
音であった。俺の背筋は凍るようだった。馬を  
持つものはこの世界では貴族しかなく、貴族に  
見つかるということは俺たち鍵師にとって永遠  
の地下牢での縛めを意味するからである。